ヘルダリンにおける父と母のイメージ
― 詩作と心理の「同一性という謎」―

林　英哉

1

ある芸術作品を理解するために、それを生み出した芸術家の側面から論ずることは、作品の自律性が云々される現今においても、もっとも基本的なアプローチの一つでありつづけている。それは、人間によって作り出されて初めて、作品は存在しうる、という明確な事実によっている（もちろんその他に、芸術的価値を作品に認める受容者の問題も絡んではくるが)。したがって、芸術作品はなぜ芸術作品たりうるのかという問いは、芸術家はなぜ芸術家たりうるのかという問いと同義として、しばしば問われることになる。また、芸術作品を芸術作品として論ずるためには、それが持っている特殊性や卓越性を前提とせねばならないが、それは同時に、芸術家個人の特殊性や卓越性を暗黙裡に想定することでもある。そして、そこから新たな問いが、すなわち、神から類まれな才能を贈られた天才は、芸術作品を生み出せない凡人と何が決定的に違うのだろうかという問いが生じることになるだろう。

そのような疑問の連鎖が、芸術家と狂気をめぐるディスクールの礎である。狂気に陥った者は、人々にとって恐るべきアウトサイダーであると同時に、特殊な能力を宿す畏怖の対象である。それゆえに狂気という属性は、しばしば芸術家に帰せられることとなる。ここで論じられるフリードリッヒ・ヘルダリン（1770-1843）は、その代表的な人物である。彼は精神を病みながらも詩作をつづけていたが、通常の生活が送れないほど病状が悪化した後、30年余りをテュービンゲンの通称ヘルダリン塔にひきこもって過ごした。この逸話の印象が強すぎるために、彼の作品自体はその陰に隠れ、生前、没後ともに、ほそぼそと読まれるだけであったこともまた事実である。しかし、第一次世界大戦直前に、その状況は一変した。ノルベルト・フォン・ヘリングラートによってヘルダリンのピンダロス翻訳が発見され、同時に不完全ながらも全集の刊行が開始された結果、彼はドイツを代表する祖国詩人の一人として、熱狂的に受容されることとなる。

その立役者ヘリングラートは、戦地にたおれる前年に行った講演『ヘルダリンと狂気』(1915)において、それまでヘルダリンの作品の理解が進まなかった原因を、狂気というイメージがそ

れを妨げてきたからだとしている。「狂気とは、謎めいたものとしてひきつけ、不可解なものとしてはねつける秘密である。それは、好奇心を持って問うようにと誘うのであるが、それこそが、彼の名前を彼の作品の奇跡よりも広く知らしめ、皆に対し彼の作品を影で覆い、ほとんど隠してしまうのである」。[1] しかし、逆に言えば、まさに「そのために、[彼の狂気を正当に論じる（引用者注)] 我々には、今やようやく作品の全体的な見通しが開けてくるのである。つまるところ、狂気とは彼の人生の出来事の中でもっとも広い射程を持つものであり、彼の運命の形式を示すしるしなのである。」[2] ヘリングラートは、ヘルダリンの狂気を理解することで、彼の作品を理解しようとする。そういった試みを意識的に開始したことは評価できるものの、その一方で、彼がゲオルゲ・クライスに非常に近い位置にいたこともまた、忘れてはならない。ゲオルゲ・クライスは詩人の英雄性や優越性を信奉したが、ヘルダリンもまた、彼らのカリスマ同様に神秘化の対象となった。そして、そのきっかけが、ヘリングラートによるヘルダリンの〈再発見〉であったことは明らかであるし、実際この講演の中でも詩人を「神性の叫び（Schrei der Gottheit)」[3] に喩えていることから見て、ヘリングラート自身もまた、詩人の神秘化から逃れることができなかったように思われる。[4]

芸術家の精神に光を当てることは、作品をより理解することに資するが、彼が一般の人々とは異質な存在であることの過剰な強調や、素朴な神秘化につながる恐れもある。神秘化は、人智の及ばない、まさに「神性」の領域へと芸術作品と芸術家を持ち上げ、それらの実質を問うこと自体を無意味にしてしまうのである。しかし、その危うい境界にあえて敢然と挑んだものもいる。その一例として、1961 年に『ヘルダリンと父の問い』を著した、フランスの精神分析理論家ジャン・ラプランシュの名を挙げることができるだろう。[5] 彼の研究において特徴的な

---

[1] Hellingrath, Norbert von: Hölderlins Wahnsinn. In: Ders.: *Hölderlin-Vermächtnis.* Eingeleitet von Ludwig von Pigenot. 2. Aufl. München 1944, S. 151-184, hier S. 152.

[2] Ebd.

[3] Ebd., S. 171.

[4] ヘリングラートが用いている「秘密（Geheimnis)」という言葉は、そもそも多分にゲオルゲ・クライス的な言葉である。彼らが頻繁に用いた概念として「秘せられたドイツ（das Geheime Deutschland)」があるが、それは、例えばカール・ヴォルフスケールにとっては、「幾度となく中断されてきたドイツの文学や理念の歴史における、再発見された統一性」のイメージであり、そしてその「統一性」を担ってきたのが、他ならぬ詩人たちなのであった。Schefold, Bertram (in Verbindung mit Bruno Pieger): Wege des Geheimen Deutschland. Eine Einführung. In: Ders. / Pieger, Bruno (Hrsg.): *Stefan George, Dichtung – Ethos – Staat: Denkbilder für ein geheimes europäisches Deutschland*. Berlin 2010, S. 31. ヘリングラートもまた、講演『ヘルダリンとドイツ人』（1915）において、「ゲーテの民族」ではなく「ヘルダリンの民族」としてのドイツ人を標榜する際に、この言葉に一度言及している。Hellingrath, Norbert von: Hölderlin und die Deutschen. In: Ders.: *Hölderlin-Vermächtnis*, S. 119-150, hier S. 120. ゲオルゲ自身も『秘せられたドイツ』というタイトルの詩を書いているが、この詩には — 彼の詩の多くにおいてそうであるように — ヘルダリンからの強い影響が見て取れる。Vgl. Bothe, Henning: *„Ein Zeichen sind wir, deutungslos“: die Rezeption Hölderlins von ihren Anfängen bis zu Stefan George*. Stuttgart 1992, S. 165-171.

[5] Laplanche, Jean: *Hölderlin et la question du père.* Paris 1961. ドイツ語版は以下。Ders.: *Hölderlin und die Suche nach dem Vater.* Übers. von Karl Heinz Schmitz. Stuttgart 1975. 本論文におけるラプランシュからの

のは、タイトルにも表れている通り、ヘルダリンの詩作と人生双方の根底に「父の問い」があるという論点である。[6] ヘルダリンは2歳のときに一番目の父を脳梗塞で、8歳のときには二番目の父を災害で失ったが、この結果負うこととなった父の不在という傷が、彼の精神と詩作に影響を与えたとラプランシュは示唆する。彼は、ラカンの言うところの「父の名」（詳しくは後述）がヘルダリンに欠けている可能性を、彼にとって父的存在のようにも見えるフリードリッヒ・シラーとの関係性の中に見出す。[7] そしてそれが、例えば『ヒュペーリオン』の中心モチーフである、他者との鏡像的な一対一関係に現れていると暗示する。

ラプランシュは常に断定を避け、行き過ぎた議論にならないよう細心の注意を払っている。そのような彼の慎重な議論を、ヘルダリンにおける父的なものの重要性という観点にのみ還元してしまうのなら、それは不十分な理解にしかならないだろう。我々がここで注視すべきは、その陰にある、二人の夫の死によって大きな打撃を受けた、ヘルダリンの母の存在である。ヘルダリンの心的生を扱う研究においては、ヘルダリンに対する母という存在の大きさを最重要視する傾向がある。[8] それはある意味では当然である。なぜなら、彼と母の極めて密接な関係は、書簡から明確に読み取ることができ、実証可能であるからだ。ただし、そういった研究はしばしば単なる伝記研究に終わり、母がヘルダリンの詩作に対し、具体的にどのような影響を及ぼしてきたかまでは、十分な議論がなされているとは言い難い。[9] ラプランシュはヘルダリンと母との間の書簡を詳細に分析し、そこから得られた知見を作品分析に用いているものの、

引用は、このドイツ語版から行う。

[6] ドイツ語版では、タイトルが「問い（la question）」から「探求（die Suche）」に変更されている。これにより、ヘルダリンにおける父への志向性がより強調されている。

[7] その際にラプランシュは、シラーへの書簡に現れた、〈近さ〉と〈遠さ〉に象徴される両価的な心情（本論文5頁の引用を参照）に注目する。Vgl. Laplanche: *Hölderlin und die Suche nach dem Vater*, S. 65ff. 彼の見出した、ヘルダリンにおける〈近さ〉と〈遠さ〉の弁証法は、ロマーン・ヤーコブソンらによる、晩年のヘルダリンの詩作についての研究にも大きな影響を与えた。Jakobson, Roman / Lübbe-Grothues, Grete: Ein Blick auf *die Aussicht* von Hölderlin. In: Jakobson, Roman: Hölderlin, Klee, Brecht: zur Wortkunst dreier Gedichte. Eingeleitet und hrsg. von Elmar Holenstein. Frankfurt a. M. 1976, S. 27-96.

[8] 例えば、Peters, Uwe Henrik: *Hölderlin: wider die These vom edlen Simulanten*. Reinbek 1982, S. 177-188; Carstanjen, Eva: *Hölderlins Mutter: Untersuchungen zur Mutter-Sohn-Beziehung.* Frankfurt a. M. / New York 1987. 対して、父をめぐる議論は近年あまり注目されなくなっている。2002年出版のヘルダリン・ハンドブック内の、ヘルダリンの精神病研究史を扱った項目においては、言及されてしかるべきはずのラプランシュの論が完全に無視されている。Wittkop, Gregor: Anmerkungen zur pathographischen Debatte. In: Kreuzer, Johann (Hrsg.): *Hölderlin-Handbuch*. Stuttgart / Weimar 2002, S. 54f.

[9] 一方で、ヘルダリンの後期の詩において母的形象がどのような意味を持っていたかについては、以下のような研究がある。しかし、逆にそれらにおいては、ヘルダリンと現実の母との関係は視野に含まれていない。Böschenstein, Bernhard: Das Verhältnis zur Mutter als poetologische Figuration in drei Hymnen Hölderlins. In: Roebling, Irmgard / Mauser, Wolfram (Hrsg.): *Mutter und Mütterlichkeit: Wandel und Wirklichkeit einer Phantasie in der deutschen Literatur*. Würzburg 1996, S. 187-194; ders.: Hölderlins Gedicht *Am Quell der Donau* – Versuch einer Lektüre. In: Jamme, Christoph / Lemke, Anja (Hrsg.): *„Es bleibet aber eine Spur, doch eines Wortes": zur späten Hymnik und Tragödientheorie Friedrich Hölderlins.* München 2004, S. 67-76.

ヘルダリンと父的形象との関係から出発する彼にとっては、詩作に対する母の影響そのものは主たる関心事にはなりえなかった。このような先行研究の欠落部を補い、ともすれば安易に陥りがちな父と母の二者択一的議論にはまることなく、ヘルダリンの詩作に対して彼ら双方が持つ意味について、理解の一つの方向性を示すことが、本論の狙いである。

ミシェル・フーコーはラプランシュの著作に対する書評の中で、ラプランシュが行った、詩作と心理とを結びつける精妙な分析を高く評価している。しかし同時に、いくら大胆かつ慎重に議論を進めたところで、「詩的構造と心理学的構造とを連動させる解読は決して両者の間の距離を縮めることはないだろう」と、強調することを忘れない。[10] この二つのディスクールの間には、やはり乗り越えることのできない絶対的断絶がある。しかし、たとえ一致することがなかったとしても、それらは「無限に近接しうる」ものであり、「作品と狂気との間の意味(サンス)の連続性は、断絶の絶対性の出現を許すような同一性という謎から出発して初めて可能になる」のである。[11] 詩作と心理との間に同一性を見出すことは、それらの連続性を可能にすると同時に、断絶の絶対性をも再認識させる。だからこそ、同一性とは、解くことを誘いつつ拒む謎なのである。すでにヘリングラートは、このダブルバインドに気づいていた。しかし、彼はそれに気づいた上で、そこから逃亡したのである。一方ラプランシュは、この謎を謎のままにとどめ、解く試みそれ自体を不可能にする神秘に変えてしまうことを、最後まで拒絶した。[12] 謎は、解かれる可能性も — 潜在的にではあるが — 保有するからこそ、謎でありうるのであり、そこには可能性と不可能性とを両立させる両価性がある。この両価性が、詩作と心理の間に同一性を見出すよう誘い、それゆえ、問いが絶えることなく発しつづけられるのである。

2

ラプランシュは自身の著書の第一章を「イェーナの憂鬱（Die Jenaer Depression）」と名づけている。彼がここで言わんとしているのは、ヘルダリンの精神疾患の症候は、1795 年にイェーナのシラーのもとにいたころから顕在化するようになったということである。ヘルダリンにとってシラーは、単なる師という存在を超えた、父親のような存在であった。[13] 彼は 1794 年から

---

[10] ミシェル・フーコー「父の〈否〉」（湯浅博雄／山田広昭 訳）：小林康夫／石田英敬／松浦寿輝 編『狂気・理性』（フーコー・コレクション 1）ちくま学芸文庫 2006 年、244~276 頁所収、271 頁。

[11] 同頁、強調はフーコー。

[12] ラプランシュは、ヘルダリンの神秘化を行った代表的人物として、ヘリングラートの他にモーリス・ブランショの名を挙げて批判している。Vgl. Laplanche: *Hölderlin und die Suche nach dem Vater*, S. 19ff.

[13] 1795 年 2 月 22 日の母宛の書簡によれば、「私の今のところの展望は、これ以上ないくらい良好です。— シラーは、まるでまさに父親のように私の面倒を見てくれるので、最近もこの偉大な方に、こんなに関心を持っていただけるほどの値打ちが私にあるのかわかりませんと、打ち明けずにはいられない

ヴァルタースハウゼンのカルプ家において、シラーに紹介された家庭教師の仕事に就いていたが、教え子に対する教育の成果が思ったように上がらず、翌年、環境を変えるためにシラーのいるイェーナへと教え子を連れて移ることになる。そこでヘルダリンはフィヒテの講義を聴講し、ゲーテとも面会するなど（とは言ってもヘルダリンはそれがゲーテであるとは気づかなかったのだが）、思想形成に当たって貴重な時間を過ごした。彼はシラーの傍で着々と経験を積んでいるように見えた。しかし、1795 年夏、彼は突如としてシラーのもとを逃げるように立ち去ってしまう。その理由は、後に書かれた、シラーに対する弁明の手紙でうかがい知ることができる。

> ある精神の影響力が、たとえ言葉によって及ぼされなくとも、ただその近くにいるだけで、その影響下にある自分を幸福と感じることができるということ、また、それから 1 マイル離れるごとに一層さみしく感じずにはいられなくなるということは、奇妙なことです。この近さのゆえに不安な気持ちになるということが、これほどしばしばでなければ、他にどんな動機があったにせよ、大胆にも立ち去ってしまうことなど、困難であったでしょう。私は常にあなたにお会いしたい誘惑を感じていましたが、お会いすれば、いつもただ、私はあなたにとって無（nichts）なのだ、と感じざるをえなかったのです。私が持回る苦痛で、必然的に自分の誇らしい要求の代償を支払うことになるということがわかりました。私はあなたにとって多くのもの（viel）であろうとしましたので、あなたにとって無（nichts）であることを、自分で思い知らざるをえなかったのです。（シラー宛書簡、1795 年 11 月 9 日、MA II, 589f.）

書簡において、ある心情が意図的に強調されたり、逆に隠されたりすることは、相手との心理的駆け引きの上でしばしば取られる戦略であるが、この引用部では、ヘルダリンのシラーに対する愛着が臆面もなく表明される一方で、その裏にある暗部がかすかに見え隠れしていることが興味深い。ヘルダリンは、シラーが自らにもたらす影響を幸福に感じているものの、それはまた、彼に不安を抱かせるものである。シラーの偉大さに比べて自分はなんと無価値なことだろう、自分は彼に必要となんかしてもらえない。そう感じざるをえなかったがゆえに、ヘルダリンはシラーのもとを離れざるをえなかった。ヘルダリンは、シラーにとって自分は無価値であるという苦痛が自らの「誇らしい要求」の代償であると見なしている。これは、自分に目を

ほどでした」（強調は引用者）。Hölderlin, Friedrich: *Sämtliche Werke und Briefe*. Hrsg. von Michael Knaupp. Bd. II. München 1992, S. 571. 以下、本論文におけるヘルダリンの作品や書簡等からの引用は、Hölderlin, Friedrich: *Sämtliche Werke* [Große Stuttgarter Ausgabe = StA]. Hrsg. von Friedrich Beißner. 8 Bde. Stuttgart 1943-1985; ders.: *Sämtliche Werke und Briefe* [Münchner Ausgabe = MA]. Hrsg. von Michael Knaupp. 3 Bde. München 1992f. より行い、略号と巻・頁数で該当箇所を示す。

かけてくれているシラーの期待に応えるような仕事をしたいという「誇らしい要求」こそが、実際はそれが上手くいかないがゆえに、かえって自らの無能さと無価値さをヘルダリンに痛感させ、苦しみを与えてしまっていることを意味している。別の書簡で、ヘルダリンは、シラーを彼の「自由を失わせた人」（シラー宛書簡、1796 年 11 月 20 日、MA II, 636）と呼んでおり、また、シラーに「支配されている」（シラー宛書簡、1798 年 6 月 30 日、MA II, 690）という恐怖を感じざるをえなかったがゆえに、自らの「自由を確保するために」（ebd.）彼のもとを離れなければならなかったとも述べている。つまり、シラーに愛着を抱きつづける限り、ヘルダリンは、彼によって支配され、自らの自由が制限されてしまい、その結果、自己が浸食され、最終的には消滅してしまうのではないかという恐怖から逃れることができないのである。それゆえ、ヘルダリンはシラーから逃げ出した、すなわち愛着対象の喪失を、意図的に作り出したのである。しかし、彼はそれでもなお、シラーに対する愛着を保ちつづけている。それは、出奔から 3 年経った 1798 年の時点で、まだそのときの言い訳を口にしていることから見ても明らかだろう。[14] だからこそ、彼は自ら望んで対象から離れたということをどうしても認めるわけにはいかない。それを認めてしまえば、自らその愛着を根本から否定したことになってしまうからだ。それゆえ、自ら責任を負うことのないように、自分が相手を必要としなかったのではなく、相手の方が自分を必要としてくれなかったのだ、という言い訳を作りあげるのである。

そして、シラーに対するこの両価的な心情を、ヘルダリンは明確に彼のヒュペーリオンに投影している。そもそも『ヒュペーリオン』プロジェクトは、ヘルダリンがテュービンゲン大学付属の神学校に在籍していたころから、足かけ 5 年もの間取り組みつづけたものであり、彼の思い入れは相当なものであった。[15] ヒュペーリオンはアダマス、アラバンダ、ディオティーマという副人物たちと、常に一対一の密接な関係を築こうとする。しかし、この試みはどれも失敗に終わる。例えばアラバンダとの場合、ヒュペーリオンは彼と出会ってすぐ意気投合し、理想的世界について熱く語り合う。しかし、ヒュペーリオンはふとした瞬間に、彼の顔に「嘲りの影」（StA III, 32）を見て、猜疑心を抱いてしまう。この猜疑心はその後、アラバンダが所属している結社のメンバーが二人の前に現れて彼の隠された秘密が明らかになることで、完全なものとなる。ヒュペーリオンはアラバンダに失望し、彼が自分を見捨てたのだと考える。しかし、先に猜疑心を抱いていたのはヒュペーリオンの方であり、この伏線を見逃してはならない。

このシーンが持っている重要性は、愛着対象にふとしたことから猜疑心を抱いてしまうとい

---

[14] もっとも、このときヘルダリンは、雑誌を発行するためにシラーの助力を切実に必要としていた。彼がシラーに対する愛着を強調し、何年も前の失態に対して言い訳しなければならなかった背景には、そういった実際的な理由もあったことも考慮しなければならない。

[15] ヘルダリンは、ヒュペーリオンを自分の「一部」だと見なしていた（妹宛書簡、1797 年 4 月、MA II, 654）。

う描写が、それに先立つ稿『ヒュペーリオンの青年時代』において、すでに存在していることからも明らかである。

> あそこにふたご座が海から上ってきたぞと、ぼくは喜びの声を上げた。その一瞬後、偶然鏡を見た。そしてその鏡の中にノターラ［アラバンダの原像（引用者注）］の両義的な（zweideutig）笑みを見たと思った（glaubte）。（…）それはぼくの心臓に突き刺さった匕首であった。ぼくは、自分の内奥が辱められ、最善の喜びが嘲られ、自分の一番の友によって自分の心が笑いものにされたと思った（glaubte）。（StA III, 212f.）

ここでヒュペーリオンは「思った（glaubte）」という言葉を繰り返し用いている。これは、ここで示された認識が客観的な情報ではなく、あくまで彼の主観性が多大に影響したものであることを（おそらく意識的に）匂わせている。つまり、ヒュペーリオンが友の顔に両義的な笑みを見てしまうのは、実はヒュペーリオンこそが相手に対して両義的な心情を抱いているからなのだ。ここで彼が示しているのは、対象に愛着を抱くと同時に、それを嫌悪するという両価的な心情である。

彼がその心情を抱くのは、アラバンダに対してだけではない。さらに以前の稿『断片ヒュペーリオン』において、ヒュペーリオンは自分が崇拝する女性メリーテに対して、次のような感情を抱く。「おお神よ！　ぼくには彼女の聖なる平和の微笑み、天上の言葉のどれもが死の使者にならざるをえなかった。それは彼女が、彼女の心がどれほど満ち足りているかを告げ知らせるものであったから。だからぼくには絶望が訪れざるをえなかったのだ、ぼくが愛しているこのすばらしい存在は、あまりにすばらしいから、ぼくを必要としてくれないのだと。」（StA III, 170）この「必要としてもらえない」という感情は、シラーへの書簡において示されているものと極めて高い類似性を示している。また、最終稿の『ヒュペーリオン』において、アダマスとの別離後にヒュペーリオンが初めての鬱状態に陥ったときにも同じく、「誰もぼくを欲してくれなかったのだ。／おおこのように無と化した（vernichtet）自分を見るのは嘆かわしいことだ」（StA III, 18）と悲痛の声が発せられる。自分は無価値であり、誰も必要としてくれない。このような、愛着を抱く他者からの疎外感に、ヘルダリンは『ヒュペーリオン』プロジェクト執筆時、強く囚われていたのである。

3

そして、ヘルダリンにこのような心理状態を引き起こした存在が、シラーの他にもう一人いる。母ヨハンナ・クリスティアーナである。ヘルダリンにとって女性が持つ意味の大きさは、

『ヒュペーリオン』や詩における、ディオティーマという理想化された女性像に見て取れるが、それは、ルイーゼ・ナストやズゼッテ・フォン・ゴンタルトといった、実人生において出会った女性たちとも深い結びつきを持っていた。そして、ヘルダリンにとって絶えず重要な役割を果たしてきた女性と言えば、彼の母であることは議論を待たない。[16] 彼女の存在がヘルダリンにとって最大の慰めになっていたことは、彼が彼女に送った多くの書簡から窺い知ることができる。

ヘルダリンは、1795年夏にイェーナから出奔した後に、ニュルティンゲンの母のもとへ逃げ帰る。そしてその数年後、家庭教師の仕事のために赴いたスイス、そしてボルドーを失意のうちに立ち去るときにも、彼の足は自然と故郷の母のもとへと向くこととなる。ただし、この反復行動に一度だけ例外があったことは、興味深い事実である。それは、1797年秋、家庭教師として滞在していたフランクフルトのゴンタルト家を辞去しなければならなくなったときのことである。その際、彼は母のもとへは帰らずに、フランクフルト近郊のホンブルクに住む友人に助けを求めた。この理由の一つとして、ディオティーマの原像として見なされているズゼッテとの交渉を保持しつづけるためであった、ということが挙げられるだろう。しかし、ここで注目すべきは、それまで良好であった（ように見えた）母との関係もまた、このホンブルク時代に変質をきたしていたことが、彼女宛の書簡において、如実に表明されていることである。

> たとえあなたが言葉では、私にご自身のことをすべておっしゃることができなくても、それは確かに私の心の中に生きており、そして私は機会あるごとに驚きを覚えるのです。なんとあなたは密かに私を支配していらっしゃることかと、なんと私の心情はぬぐいがたく忠実な気遣いを持って、あなたのことを気にかけていることかと。（…）しばしば私は神経が荒れて、落ち着きなく人々の間を歩き回りましたが、それはいつも、あなたが私に喜びを感じていらっしゃらないのではないかと思ってしまうからなのでした。しかし、それは、あなたが自信を持てないというだけであって、息子を柔弱にし、わがままにしすぎることを恐れていらっしゃる、（…）ということなのではないでしょうか。（母宛書簡、1798年12月11日、MA II, 720）

ヘルダリンは母によって「密かに」「支配」されている。[17] 生計を実質的に母からの援助のみに

---

[16] ヘルダリンには恋仲だった（とされる）女性たちが数人いたものの、カルスタンイェンは（やや言い過ぎの感はあるが）「ヘルダリンが愛した女性は結局ひとりだけ、つまり母だけであった」と主張している。Carstanjen: *Hölderlins Mutter*, S. 287.

[17] カルスタンイェンによれば、「母の所有物として、彼は彼女の願望の囚われ人のようであったが、そのための高い代償を支払わねばならなかった。つまり、彼は母に対して、『従順なままに』ありつづけたのであった。」Ebd.

頼っているため、経済面においては明らかにそう言えるが、彼がこの箇所で言わんとしているのは、精神面においても同様に、彼女に依存しているということであろう。このとき、ヘルダリンはホンブルクにて、自らの文筆家生命を賭した雑誌を発行するために奔走しつつ、様々な論文や詩、エンペドクレス悲劇を執筆し、ピンダロスの翻訳を行うなど多岐にわたって精力的に仕事をこなしていた。それは文筆業で生きていくという彼の強い決意の表れであったようにも思われる。ヘルダリンはそれまで母に対しては、詩作に対する愛着を控えめにしか表現してこなかったが、いまやそれをはっきりと彼女に告白できるようになった。詩作は「より高尚で、純粋な仕事」であり、「私のもっとも本来の仕事」であると（同書簡、MA II, 719）。しかし、彼女は昔からそれを積極的に応援することはなく、彼に牧師や教師の仕事に就いて、実直に働くよう希望していた。その態度を彼女は一貫して取りつづけ、変えることはなかった。このときは、執筆活動に専念するヘルダリンに対して、家庭教師の仕事を紹介し、働くようにと促している。しかし、彼はそれを、やんわりとではあるが拒絶する（同書簡、MA II, 718f. 参照）。つまり、母は息子が詩作にのめり込むことを快く思ってはおらず、それに制限をかけようとしているが、一方の彼は、その支配に対して不快感を抱き、それを彼女に向かって表明しようとしているのである。

先の引用部において、ヘルダリンは、自分はこんなにも母のことを思っているのに、なぜ母は自分のことを認めてくれないのか、自分の気がおかしくなるのはすべて母のせいだ、とでも言いたげである。この心情の背景には、彼女に対する、満たされることのない強い承認欲求があることは明らかである。実際、彼は作品内においても、自分を承認してくれる理想の母親像を登場人物（ディオティーマ）に投影していた。「この愛しいひとは、ぼくの頬のどんな変化も鏡より忠実に教え、しばしば優しく気づかいながら、ぼくの落ち着きのない性格を戒め、愛しい子どもを叱るように叱った」（StA III, 62、強調は引用者）。彼女はヒュペーリオンに対し、民衆の教育者になることを求め（StA III, 89）、自らの死と引き換えに彼の詩作の日々の芽生えを伝える（StA III, 149）。こうして彼女はヒュペーリオンの詩作を承認する。[18] 加えて言うならば、彼女のモデルとも言われるズゼッテもまた、ヘルダリンの将来を心配しつつ詩作を応援してく

[18]「母からの承認」のモチーフは、『ヒュペーリオン』におけるディオティーマとの別離の場面にも現れる。ディオティーマの母は「思慮深く思いやりのある人」（StA III, 53）で「高貴な女性」（StA III, 99）であった。ヒュペーリオンは、彼とディオティーマとの仲を承認してくれるよう彼女の母に依頼する。「彼女にも祝福していただこう、この誠実なお母様に、君［友人ノターラ（引用者注）］たちとともにぼくたちの証人になっていただこう。おいで、ディオティーマ。ぼくたちの絆をお母様に聖なるものにしていただこう、ぼくたちの望む美しい共同体がぼくたちを結びあわせてくれるまで。」（StA III, 100f.）また、『ヒュペーリオン』の多くの箇所で、母子関係が賞賛のうちに描かれていることも付言しておく。例えば、「なんとうっとりする光景だったろう。母親がやさしく、『私の一番かわいい子はどこですか』と尋ねると、子どもたちはみなその懐に飛びこんでゆき、一番の幼子までもゆりかごから両腕を伸ばしている。そのように、生あるものはみな、神々しい大気へと羽ばたき、飛び上がる（…）。母なる大気はすべてのものの心にしみいり、すべてを高め、ひきつけた。」（StA III, 49f.）

れる年上かつ目上の女性、いわば〈母〉であった。彼女は「あなたの、愛すべき著作、詩、手紙」（ズゼッテからの書簡、1799年9月または10月、MA II, 827）を読むことで別離のつらさを癒しているとヘルダリンに伝え、彼の詩作の価値を承認する。

このような、自らの「もっとも本来の仕事」に承認を与えてくれる理想的女性への憧憬が、『断片ヒュペーリオン』に登場する女性メリーテのころから綿々とつづいていることは、紛れもない事実であろう。しかし、ディオティーマ（メリーテ）とヒュペーリオン、そしてズゼッテとヘルダリンというペアは、最終的には結ばれることはなかった。なぜなら、彼女たちは自らが作り出した理想であり、単なる虚像にしか過ぎないことを、彼ら自身もまた理解し、認めざるをえなかったからであろう。とりわけズゼッテにかんしては、そもそも許されざる関係（名家の奥方と居候の家庭教師）であったため、その愛が成就するはずのないものであることは始めからわかりきっていた。

母に対する承認欲求と、それが満たされないことの不満。これがヘルダリンに母への不平を表明させることになった。ヘルダリンが自らの「もっとも本来の仕事」である詩作をつづけていくためには、今こそ、母との関係を新たなものとすることが必要であったのだ。

> ああ、お母さま、私たちの魂を引き離すのは、私とあなたの間にある何かなのです。私はそれに、何という名前をつけたらよいかわかりません。私たちのどちらか一方が他方を軽んじているのでしょうか、そうでなければ何であるのでしょうか。（母宛書簡、1798年12月11日、MA II, 720）

「私たちの魂を引き離すのは、私とあなたの間にある何かなのです」という発言は、単に事実確認的（コンスタティヴ）なものとしてのみ理解されるべきではない。すべての言表行為は行為遂行的（パフォーマティヴ）にも機能する。[19] つまり、この発言によって、二人を切り離す「何か」が、ヘルダリンの意識の中に決定的に出来上がるのである。「どちらか一方が他方を軽んじているのでしょうか」という責任の所在を限定しない疑問をヘルダリンが述べるのは、自分の詩作を応援してくれない母を批判しつつ、自分にも非があるのではないかとほのめかすことであり、母に対する両価的な心情の告白である。それでは、二人の間に作り出された「何か」が意味しているものとは何であろうか。

---

[19]「AはBである」は事実確認的言表であるが、これを「AはBであると、私は確認する」という行為遂行的言表の後半部が省略された形と考えるならば、事実確認的言表を含めたすべての言表は行為遂行的であると見なすことも可能である。つまり、行為遂行的言表は事実確認的言表の枠組みから逸脱した特殊なものではなく、実はすべての言表の基盤をなすものであり、「代補（supplement）」として既存の階層秩序を脱構築するのである。ジョナサン・カラー『ディコンストラクション』新版 I（富山太佳夫／折島正司 訳）岩波現代文庫 2009年、181頁以下参照。

4

その「何か」について考える際に、やはりラプランシュの議論が、我々に有益な示唆を与えてくれるだろう。それはすなわち、母子関係にとっての第三項である父の観点を議論に導入することである。ヘルダリンの二番目の父親は彼が 8 歳のときに亡くなっているが、その臨終の際の情景は、彼の脳裏にしっかりと焼きついており、16 歳のときの詩『我が家のものたち』[20] (StA I/1, 15ff.) においても明々と描写されるほどである。その詩の中では、神が父を連れ去ってしまったときに、母がその悲しみゆえに気を失い、埃の中に臥している様子が歌われている。ここで明白に示されているのは、父は天へ、母は地へという二極化であるが、一方、少年ヘルダリンは、母の傍らに寄り添いながら天を仰ぎ見ることで、父と母の双方の媒介者として存在している。そしてそのとき、彼の体を「聖なる戦慄」(StA I/1, 16) が貫いた。そして、「永久にその暗黒の命日が私の目の前に浮かぶ」(ebd.)。この「永久」という言葉は、単なる誇張ではなかった。その 13 年後、この臨終時の光景は、母への書簡の中で再び彼の口に上ることになる。

> 亡き父上についてのお言葉に対しても、私はどれほど心から、あなたに感謝していることでしょう。あの善良な方、高貴な方！　私は何度も、常に明朗 (immerheit[er]) でいらっしゃった父上のことを考え、父上と同じでありたいと思いました、そのことは信じてください。そして、あなたもまた、最愛の母上！　私にこのような悲しみへの傾向をお与えになったわけではありません。もっとも、これについて、自分をすっかり純粋に語ることなどできませんけれども。私には自分の生涯が、ほとんど一番昔の少年時代までもがかなりはっきりと見え、そして、いつごろから自分の心がそちらへ傾いたかもよくわかります。このように申し上げても、ほとんど信じてもらえないとは思いますが、私はいまだにあまりにもよく覚えているのです。その愛がいつまでも忘れられない二番目の父上が亡くなられたとき、私が孤児となってわけもわからぬ苦しみを感じ、あなたの日々の悲しみと涙を見たとき、そのとき、私の心は初めてこのような厳粛な気持ちになりました。そして、それが二度と私から離れなくなって、年とともに大きくなるばかりだったのです。しかし私の本質の底にも、ある明朗さ、ある信仰があって、それは今でもときどき、胸いっぱいに真の喜びとなって湧き出てきます。ただ、これのための言葉が、苦しみのための言葉と同じように、容易には見つからないのです。(母宛書簡、1799 年 6 月 18 日、MA II, 775)

---

[20] 原題は女性単数形の「Die Meinige」であり、母のことを指していると取ることができる。ただ、複数形「Die Meinigen」の最後の「n」が省略された口語形としての用例があり、ここにおいてもヘルダリンの家族全体（とりわけ父と母の二人）を指すと見る向きが一般的である。Vgl. MA III, 41.

ヘルダリンは、自らが「悲しみへの傾向」を持っていると認めている。そして、その陰鬱なる気質を得たのは、彼の言葉によれば、二番目の父が亡くなり、母が悲しみに暮れていた、ちょうどそのときだったという。つまり、ヘルダリンの「悲しみへの傾向」は、夫の死を悼む母の姿に由来するものであり、彼女への同一化の表れだと言える（少なくとも彼自身はそう見なしている)。そして、そのことを述べる前に、ヘルダリンは一度母の関与を否定し、留保をつけているということにも注意したい。ここに母に対する両価的な感情が見え隠れしている。ヘルダリンは、明朗であった父のようでありたいと思うも、それは叶わない。その理由は、悲しむ母に同一化していることが、明朗な父に同一化することを妨げているからである。そして、ラプランシュはこの二番目の父の臨終の描写を次のように解釈している。「母の悲しみはヘルダリンの父を対象としているのではなく、その代替物［二番目の父（引用者注)］を対象としている。そのため、母は詩人に対し、いかなる方法によっても父へのつながり＝媒介（Vermittlung）を生み出すことができないのである」。[21]

この一番目の父とのつながりの切断が、ラプランシュが自らの研究で問題としている、ヘルダリンにおける「父の名（Nom-du-Père）＝父の否（Non-du-Père)」の不在の根拠となっている。この「父の名」という概念は、ラカン派精神分析の用語であり、もともと精神分析を専門とするラプランシュの論にとって、ひときわ重要な意味を持っているように思われる。「父の名」は、ラカンの用語らしく非常に込み入った概念であるが、フーコーがラプランシュに対する書評の中で、簡潔明瞭に要約しているものをまずは引用したい。

> メラニー・クラインが、そして続いてラカンが証明したように、オイディプス的状況における第三の人物としての父親とは、よそ者として、ただ単に憎まれ、恐れられるライバルであるだけでなく、その存在によって母親と子供との間の限界を知らない、無境界的つながりに境界を画するものなのである。母親と子供とのこうした融合的関係に最初に不安に満ちた表現を与えているのは、食われてしまうという幻想なのであるが、父はそのとき、分離するもの、すなわち保護するものとして、〈法〉を宣告しつつ、空間と規則と言語（ランガージュ）とを一個の重大な経験として結合するのである。[22]

「父の名」は〈法〉として、母と子の無境界的つながりに「否（Non)」を突きつけ、分断する。しかし、この動作は両価的な性格を持つものである。父は、母とのつながりを切断するものとして、子にとって脅威であり不満の対象であるが（いわゆる去勢コンプレックス)、同時に母の

---

[21] Laplanche: *Hölderlin und die Suche nach dem Vater*, S. 108.

[22] フーコー「父の〈否〉」、266 頁。

脅威から子を守る役割も果たしている。「母に食われてしまう」という幻想は、彼女に対する、ナルシシズム的で無境界的な同一化や依存に由来する恐怖であり、それはヘルダリンが示している、母によって支配され、自己が侵食されていくことへの恐怖と、同じ基盤を持っていると捉えるべきである。それゆえ、ヘルダリンがシラーのもとを去らねばならなかったのも、ヒュペーリオンが愛する人々と離別せねばならないのも、この母との無境界的同一化に起因する恐怖が生み出した帰結であると解釈できる。ヒュペーリオンが思わず口を滑らせてしまう、〈母〉ディオティーマの「魅惑する聖なる甘美な生を飲み込んでしまいたい」（StA III, 120）という欲求は、自己が他者によって支配されて自由が消滅する恐怖、すなわち「食われてしまう」恐怖が、反転したものなのかもしれない。ヒュペーリオンのカニバリズム的性格を、晩年のヘルダリンがあまり快く思っていなかったということもまた、この恐怖が背景にあると考えれば理解できる。[23]

ヘルダリンと母の間に作り出された「何か」とは、この同一化に「否」を突きつけることを期待されたものだったのだろうか。そして、それは彼の存在の深部にあるという、一番目の父の明朗さなのだろうか。これは、「父の名」が彼に欠けているからこそ生まれた、父への欲求なのだろうか。父への志向性にかんして言えば、ヘルダリンの少年時代の教師ナタナエル・ケストリーンや、シラー、ゴンタルト家で家庭教師をしていた時代に出会ったヴィルヘルム・ハインゼなど、ヘルダリンの生涯には幾人もの擬似父の存在があったことに思い当たる。彼らの存在は、ヘルダリンの中に父への欲求が早い時期から絶えず存在してきたことの証左だと見なせるかもしれない。しかし、「父の名」自体は、言語やシニフィアンの領域、すなわちラカンの言うところの象徴界にかかわるものであり、[24] そのため、現実存在としての彼らは、ヘルダリンと母との間に割って入るという「父の名」の役割を担うことなど、できるはずがなかったと言える。それは、ラプランシュが「[子を（引用者注)] 喰らう母親の姿が衝撃的に現れている」[25] と捉えている、シラーにおいて明らかである。

もし「父の名」を獲得しようとするなら、それは言葉の領域、すなわち詩作こそが、その闘いの舞台となるべきであろう。この観点に立った際にとりわけ興味深いのは、ヘルダリンが母

---

[23] 晩年のヘルダリンを訪ねたクリストフ・テオドール・シュヴァープが次のように証言している。「私が彼の『ヒュペーリオン』を読んでいると、彼はこう言った。『そんなに見入るんじゃない。それはカニバリズム的（kannibalisch）だ。』」（StA VII/3, 204）

[24]「この父の不在、精神病がそこに落ち込むことで明らかに示している父の不在は、知覚やイメージの領域に関係するのではなく、シニフィアンの領域にかかわっているのである。この裂孔が口を開けることになる「否」は、父の名が現実にそれを保持する人間をもたなかったことを意味するのではなく、父が一度として名指されるにいたらなかったことを、父が自らを名づけ、また〈法〉に従って、他のものを名づけるよりどころとなるあのシニフィアンの座が空のままであったことを意味しているのである。」フーコー「父の〈否〉」、267 頁。

[25] Laplanche: *Hölderlin und die Suche nach dem Vater*, S. 70.

に対して距離を取ろうとする態度を、書簡においてはっきりと表明し始めたホンブルク時代以後、彼の詩作のスタイルもまた、それに合わせるかのように変化していくということである。すなわち、それまでの主たる形式であった悲歌（あるいは頌歌）形式から、ピンダロス風の讃歌的な自由律形式へと次第に移行していくのである。[26] 一般に後期讃歌と呼ばれるそれらの詩歌群は、彼自身の言葉に基づいて「祖国の歌（vaterländische[ ] Gesänge）」（フリードリッヒ・ヴィルマンス宛書簡、1803 年 12 月、MA II, 927）と形容されてきた。[27] また、その中で歌われている父なる神（Vatergott）の存在の重要性は、それ以前においてより、一層増しているのは明らかである。こうした〈祖国〉や〈父なる神〉といったモチーフに支配された明朗なる讃歌を、ライナー・ネーゲレは、そのものずばり「父なるテクスト（Vatertext）」と呼んでいる。[28] ヘルダリンがピンダロスを翻訳することを通じて習得した讃歌的な詩形式は、明朗さを志向すると同時に、彼の母語＝母なる言語（Muttersprache）であるドイツ語ではない言語、ギリシャ語に強く影響を受けている。この意味で、それは「父なるテクスト」なのである。ヘルダリンの詩作技法は、ヘリングラートが「生硬な結合」と、[29] テオドール・W・アドルノが「パラタクシス」と呼んだように、[30] 母語ドイツ語が持っている統語的法則を破壊しながら「父なるテクスト」を作り上げていく。「ここでは［統語法に従って意味を付与するような（引用者注）］主体性が犠牲になっているだけではなく、母なる言語が父なるテクストの犠牲となっているのである。一語一語、ドイツ的な＝ドイツ語のテクスト（der deutsche Text）はギリシャ的なものにつき従っていく。」[31]

一方、カリン・ダールケは、ネーゲレの「父なるテクスト」に対して、「父なる言語（Vatersprache）」という概念を打ち出している。[32] この「父なる言語」もまた、「母語＝母なる言語」に対立する

---

[26] 彼の悲歌の最盛期にあたる『ディオティーマを悼むメノーンの嘆き』（StA II/1, 75ff.）と、讃歌的傾向のはしりである『あたかも祝いの日に…』（StA II/1, 118ff.）は、時期的に（そしてテーマ的にも）密接な関係の中で成立した。これについては以下の論を参照。Vgl. Szondi, Peter: Der andere Pfeil. Zur Entstehungsgeschichte des hymnischen Spätstils. In: Ders.: *Peter Szondi Schriften*. Hrsg. von Jean Bollack mit Henriette Beese [u. a.]. Bd. I. Berlin 2011, S. 289-314.

[27] Vgl. StA II/1, 121ff.

[28] Nägele, Rainer: Vatertext und Muttersprache: Pindar und das lyrische Subjekt in Hölderlins späterer Dichtung. In: *Le pauvre Holterling: Blätter zur Frankfurter Ausgabe* 8 (1988), S. 39-52.

[29] Hellingrath: Pindar-Übertragungen von Hölderlin: Prolegomena zu einer Erstausgabe. In: Ders.: *Hölderlin-Vermächtnis*, S. 19-95, hier S. 25ff.

[30] Adorno, Theodor W.: Parataxis. In: Ders.: *Gesammelte Schriften*. Hrsg. von Rolf Tiedemann. Bd. 11. Frankfurt a. M. 1972, S. 447-491.

[31] Nägele: Vatertext und Muttersprache, S. 47. ギリシャ語を語源的レベルから字義的に訳することによって、ドイツ語の統語法を否定しているヘルダリンのソフォクレス翻訳については、ヴァルター・ベンヤミンが自らの翻訳論の中で取り上げていることからも、逐語訳の極端かつ先進的な例としてよく知られている。Benjamin, Walter: Aufgabe des Übersetzers. In: Ders.: *Gesammelte Schriften*. Bd. IV/I. Hrsg. von Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser. Frankfurt a. M. 1981, S. 9-21, hier S. 17.

[32] Dahlke, Karin: *Äußerste Freiheit: Wahnsinn, Sublimierung, Poetik des Tragischen der Moderne: Lektüren zu Hölderlins „Grund zum Empedokles" und zu den „Anmerkungen zum Oedipus" und „zur Antigonä"*. Würzburg 2008, S. 125-137.

ものという点では「父なるテクスト」に類似している。ただし、テクストではなく言語であるのは、書かれたものとしてのテクストではなく、歌われたものとしての言語、という側面を強調するためであるように思われる。ダールケによれば、『パンと葡萄酒』において、その「父なる言語」が明瞭に現れているという。

父なるエーテルよ！（Vater Aether!）そう声が上がり、舌から舌へ飛び回って
　千重にもなり、何人も生を一人で担うことはなかった。
分け合えば、そのような財貨（Gut）は喜びとなり、他者と取り交わせば、
　歓呼の声は上がる、眠りながら言葉の力は育ってゆく。
父よ！　明朗なものよ！（Vater! heiter!）そしてこの太古からのしるし＝記号（Zeichen）は親たちによって遺されて、
　人の胸を打ち創造しながら、それが行くところ響き下ってゆく。
（『パンと葡萄酒』StA II/1, 92）

「父なるエーテルよ！」「父よ！　明朗なものよ！」、これがダールケによれば「父なる言語」である。[33] また、「Vater」「Aether」「heiter」という「しるし＝記号」の音声上の近似に、シニフィアン的領域との関係性も読み取れる。この天空（Aether）から響く明朗な（heiter）声は、天にまします創造主たる父なる神が、明朗という性格を与えられた一番目の父と、すなわち、母によって欲望されず、ヘルダリンが明確な結びつきを見出すことのできない、かの父と一つになったものである。「父なる言語」は、人々の舌を介して鳥のように飛び回り、天から大地へ、神々の領域から人間の領域へ、「父の不在によって破り開かれた空虚な空間」[34] を響いていく。「父の名」が不在であるからこそ、ヘルダリンは詩作を通じて、新たに「父なる言語」を響かせることができるのである。「父なる言語」が、人々の「胸を打ち」つつ、父なる神のように「創造」を行いながら響き渡るという描写は、『あたかも祝いの日に…』における「聖なる光線」「天上なる火」「父の光線」（StA II/1, 119）や、家庭教師先のボルドーで感じた「天の火」「アポロンが私を打った」（カジミール・ウルリッヒ・ベーレンドルフ宛書簡、1802 年 11 月、MA II, 921）という言葉が示すような、父なる神が詩人に対して与える、詩作という創造行為へのインスピレーションを含意している。神に〈打たれる〉というイメージは、『我が家のものたち』で歌われている、二番目の父を悼む母の傍らで感じた「聖なる戦慄」によって、すでに予告されてい

[33] 『パンと葡萄酒』は〈父〉ハインゼに捧げられているが、ハインゼの長編小説『アルディンゲロと幸福の島々』において「Vater Aether」というフレーズが登場する。ヘルダリンがこれを引用した可能性もある。Heinse, Wilhelm: Ardinghello und die glückseeligen Inseln. In: Ders.: *Sämmtliche Werke.* Hrsg. von Carl Schüddekopf. Bd. 4. Leipzig 1902, S. 320.
[34] Dahlke: *Äußerste Freiheit*, S. 134.

た。このヘルダリン固有の詩的言語こそ、ダールケによれば、「どんな言語とも、すなわち母なる言語とも混同されるべきではなく、すでに彼自身の来るべき言語、前代未聞の新しい、彼独自の父なる言語なのだ」。そしてそれが、「詩作における母からの突然の離反」となって現れているのである。[35]

5

ラプランシュの「父の名」の不在の議論と、ネーゲレのテクスト分析とを媒介するかのようなダールケの見方には、「父なる言語」という概念が曖昧なものにとどまっているというきらいがあるものの、ヘルダリンの心理と詩作とを結びつけて説明しようとしている点は興味深い。ただし、ダールケが主張する、ヘルダリンにおける〈母から分離して父へ〉という枠組みに対しては、疑念が残る。というのも、父と明確に結びついている明朗さの意味を吟味すれば、ヘルダリンは愛着を抱く母から分離することなど本当にできるのか、彼はそれを本当に望んでいるのかという根本的な問題に、我々はやはり立ち返らざるをえないからである。ヘルダリンの一番目の父は 2 歳のときに亡くなっているため、彼に父の記憶がほとんど残っているはずはなく、それは、ヘルダリン自身が述べているように、母の発言に大きく依存している（「亡き父上についてのお言葉に対しても、私はどれほど心から、あなたに感謝していることでしょう」MA II, 775）。つまり、明朗なる父のイメージとは、母の言葉を通じて、ヘルダリンの記憶に鮮明に残っている母の悲しみのアンチテーゼとして、後から作られたものであるのだ。そして、このことが意味しているのは、悲しみに沈む母がいてこそ明朗なる父が出来上がるということ、表面的には父のみを求めているようには見えても、実はその根源に、母もまた常に存在しているということではないだろうか。それゆえヘルダリンの詩作は、母に由来する悲しみに、絶えず多くを負いつづけているのである。

> 私がしばしば、いかなるときにも慰めを見出せなくなるのは、自分自身の悩みのためというよりも、完全なる孤独の中で、ときおり私が襲われざるをえない悲しみのためなのです。つまり、今のこの世界を考え、その中にいる数少ない善良な人たちが、より善良で、より優れているというまさにそのことのために、どれほど苦しんでいるかを思うと、どうしても感じざるをえない悲しみのためなのです。しかも私は、これをときおり、十分に感じていなければならないのです。なぜなら、これこそが私を、私のもっとも純粋な仕事へと駆り立てていくのですから。（母宛書簡、1799 年 6 月 18 日、MA II, 775、強調はヘルダリン）

[35] Ebd., S. 132.

「数少ない善良な人たち」の苦しみをともに苦しむことによって、ヘルダリンは「悲しみ」を得る。そして、それこそが、彼の「もっとも純粋な仕事」、詩作への原動力となる。つまり、詩人でありつづけたい、ありつづけなければならないと考える彼にとって、「悲しみ」はまさに命綱であり、必要不可欠なものなのである。そして、「悲しみへの傾向」が母への同一化によって得られたものであるのなら、悲しみが由来する「数少ない善良な人たち」の中には彼女が含まれているとも考えられる。ヘルダリンは確かに、詩作一本で生きていくことを容易には承認してくれない彼女との間に亀裂を感じていた。しかし、「悲しみへの傾向」が詩作に不可欠なものである限り、ヘルダリンはその源である母から分離することなどできない、いや、してはならないのだ。

母からの切り離しを図るヘルダリンと、それを妨げるヘルダリン。このジレンマを彼自身が生みだしているのは明らかである。では、彼はなぜジレンマを自らに課すのであろうか。あるいは、なぜ彼は「悲しみ」が詩作に必要だと考えるのだろうか。ここで我々は、ヘルダリンが母からの承認を求めていたことを思い出さねばならないだろう。それによってたどり着く帰結は、彼女に喜びを感じてもらえない詩作行為に対して、実は彼女は肯定的な影響を及ぼしているのだと、ヘルダリンは思い込もうとしているのではないか、ということである。つまり、彼女が詩作の源であることを、すなわち自らと自らの「もっとも本来の仕事」「もっとも純粋な仕事」に対する彼女の肯定的な意義を、新たに見出すことによって、彼女が詩作を承認してくれているのだと見なすこと、それこそが、彼にとって非常に大きな意味を持っていたのではないだろうか。そして、それを、他でもない彼女に向かってほのめかすこともまた、同様に。この意味において、ヘルダリンが必要としているのは単なる悲しみではなく、母の悲しみなのだと言うことができるだろう。母が父の死を悼み悲しむからこそ、ヘルダリンもまた、詩作の中で父の喪失を嘆くのである。[36]

ヘルダリンは、明らかに、彼女に対する愛着を完全に否定することなく、保持しつづけようとしている。つまり、1798 年から 1799 年にかけて書かれた、母に対して反旗を翻すかに見える内容の書簡は、「悲しみ」と「詩作」とを肯定的に結びつけることによって、最終的には、自らと彼女との緊密なつながりを新たに意味づけるものとなったのである。したがって、ヘルダリンは、たとえ母との間に距離を作ってしまったとしても、最後には母へと回帰していくのである。

そして住まいの中には人間が住んでいて、気恥ずかしい衣服へ身を包む。というのも、よ

---

[36]『ヒュペーリオン』に登場する父的形象のアダマスは、ユートピアを探しにアジアへと向かい、後に残されたヒュペーリオンは悲しみに沈む。また、『パンと葡萄酒』では「父が顔を人びとから背けたとき、悲しみが当然のごとく地上に広がりはじめた」（StA II/1, 94）と歌われている。

り親密で、注意深いことでもあるのだ、女司祭が天なる炎を守るように、人間が精神を守ることは。それは人間の知性なのだ。それゆえ、過ちを犯し、完成する恣意やより高き力が、その神々に似たものに、財貨のうちもっとも危険なもの、言語が人間に与えられている。それを使って人間は、創造し、破壊し、没落し、永遠に生き生きとしたものへ、女主人と母のもとへ回帰しながら、それを使って人間は、自らが何ものであっても、彼女のもっとも神々しいもの、すべてを保持する愛（die allerhaltende Liebe）を彼女から受け継ぎ、学んだことを証する＝生み出す（zeuge[n]）のだ。（『森の中で』StA II/1, 325）

ここでの「永遠に生き生きとしたもの」「女主人と母」は、厳密には、生命の源である「母なる大地（Muttererde）」としての〈母〉を指している。[37] しかし、ヘルダリンの一番目の父が、明朗さを媒介にして、天（エーテル）と結びついていることに鑑みれば、大地もまた、象徴的なレベルだけでなく個人的なレベルにおいても、彼の母自身と密接に結びついていると見なすことができる。ヘルダリンが歌う母への回帰とは、言語を使うこと、つまり詩作をすることによって、「すべてを保持する愛」という母との絆を明らかにすることである。ヘルダリンにとって詩作とは、簡単に言えば、一瞬で過ぎ去ってしまう聖なる神的瞬間を、言語化することを通じてとどまるものに変えて、長く保持しようとする行為に他ならない。[38] そのため、ここでの「すべてを保持する愛」とは、詩作する愛そのものを意味しているのである。

しかし、言語は同時に「破壊」と「没落」をもたらす。なぜなら、詩作は、神的瞬間を保持することを目的としているにもかかわらず、言語が本来的に持っている媒介性のゆえに、その瞬間そのものを直接的に現前させることはできず、破壊してしまうからである。[39] この二重性こそが、「財貨のうち最も危険なもの、言語（der Güter gefährlichstes, die Sprache）」の特質である。詩人は、自らを父なる神になぞらえるかのごとく、言語によって行われる創造行為について歌っているが、その直後には、言語の持つ破壊的で〈危険な（gefährlich）〉側面にも言及する。しかし、言語を用いることは、同時に、母への回帰、すなわち「すべてを保持する愛」を「証する＝生み出す」ことでもあり、それは、神的瞬間の保持という、詩作の〈良い（gut）〉側面を示している。したがって、父と母のイメージは、詩作（あるいは言語）というコインの、表と裏に対応した関係にあるのだ。

---

[37] ヘルダリンは詩の中で「母なる大地」という言葉をしばしば用いており、それをタイトルに冠した『母なる大地に』（StA II/1, 123ff.）という未完の詩もある。

[38]「いつのときも節度をわきまえ、いたわる手で／人間の住処に／神は触れるのだ、一瞬だけ」（『汝、宥和するものよ…』StA II/1, 131）。「私の見たもの、聖なるものが私の言葉でありますように。」（『あたかも祝いの日に…』StA II/1, 118）「しかしとどまるものを打ち立てるのは詩人だ。」（『追憶』StA II/1, 189）

[39] Vgl. de Man, Paul: Heidegger's Exegeses of Hölderlin. In: Ders.: *Blindness and Insight: Essays in the Rhetoric of Contemporary Criticism*. Eingeleitet von Wlad Godzich. 2. Aufl. Minneapolis 1983, S. 246-266.

ここで示されているのは、明らかに、ダールケが考えるような〈母なる言語から父なる言語へ〉〈母から父へ〉向かうという単純な分離と転向の図式ではない。ヘルダリンは、母から分離して父へ向かったのではなく、母が言語、そして詩作に果たす役割そのものに対して、新たな意味づけを行おうとしたのだ。そして、その結果として、母の哀悼の対象としての父もまた、詩の中で一層存在感を増したのである。

6

ヘルダリンは、明朗なる父と悲しみに沈む母という相対立する二つのものを、ともに志向し、媒介しようとしている。この両極への同時的志向性の傾向は、すでに『ヒュペーリオン』においても、喜びと悲しみ、協和音と不協和音の〈交替〉のモチーフに、明確に現れていた。[40] また、1801 年 12 月 4 日付のベーレンドルフ宛書簡（MA II, 912ff.）で表明された、ギリシャ的なものとドイツ的なもの、異質なものと固有なものについての、有名な議論にも、極めて類似した構造が見て取れる。そこで示されているのは、古代ギリシャ的なものから祖国ドイツ的なものに向かう、という一方から他方への転回ではなく、ペーター・ソンディが正しく洞察したように、その両方を同時に志向することこそがヘルダリンにとって重要であった、という事実である。[41] 自らに異質なものに親しむことによって初めて、自らに固有のものを知ることができるのであり、どちらか一方のみを、というのは彼の意思に反している。

しかし、このヘルダリンの詩学の根本音調とも言うべき両極への志向性を、父と母という二極に戻して考えてみた場合、一つの問題が現れる。つまり、これら二つは、ただ単に盲目的に

---

[40] この長編小説は「愛する祖国の地は、ぼくに再び喜びと苦悩とを与える」（StA III, 7）という一文で始まる。そして第一巻第二部の初めの書簡においては「海を眺め、我が人生を振り返り、その浮き沈み、その至福と悲哀に思いをはせる。しばしばぼくの過去は、かの名匠があらゆる音を駆使する弦楽の調べのように、衝突と調和とを密かな秩序とともに重ねていくように思われた」（StA III, 47）と書かれている。このように節目節目で対立する二つのものの移り変わりが強調される。そして、ディオティーマは恐ろしいほどの簡潔さをもって次のように語る。「私たちは交替の中でこそ完成されたものを表現します」（StA III, 148）。

[41] Szondi, Peter: Überwindung des Klassizismus. Der Brief an Bölendorff vom 4. Dezember 1801. In: Ders.: *Peter Szondi Schriften*, S. 345-366. ヘルダリンの伝記著者としても名高いヴィルヘルム・ミヒェルの著書『ヘルダリンの西欧的転回』（Michel, Wilhelm: *Hölderlins abendländische Wendung*. Jena 1923）に由来する「西欧的転回」という概念や、ヘルダリンが『アンティゴネー註解』の中で用いている「祖国的転回（vaterländische Umkehr）」（MA II, 375）という言葉をもとに、ヘルダリンが古代ギリシャに対して示していた憧憬を、ある時点からそっくり祖国ドイツに向け換えた、すなわち転回したという枠組みが出来上がった。これには、第三帝国期にヘルダリンのナショナリズム的傾向が強調されたことも、深く関係している。ソンディはこの見方を批判し、次のように述べている。「彼にとって肝要だったのは、異質なものを犠牲とすることのない固有なもの、パトスを犠牲にすることのない冷静であり、すなわち〈祖国的転回〉ではなく、対立するものの媒介なのである。」Szondi: Überwindung des Klassizismus, S. 357.

志向していればよいという体のものではなく、ヘルダリンにとって、言語そのものと同様に、両価的な意味を持つのである。父が贈る「天上なる火」は、詩人に詩作の霊感を与えると同時に、彼を「焼き尽くす＝喰らう（verzehret）」（『あたかも祝いの日に…』散文草稿 StA II/2, 669）危険性を常にはらんでいる。[42] そして、実直に働くよう要求し、詩作に制限をかけてくる母という否定的な存在を、どうにかして、詩作の原動力の源泉としての肯定的なものに変化させようとするプロセスは、彼女との同一化にとどまりつつ、彼女からの支配から逃れ、自己を保持しようとする撞着的な試みである。それゆえ、この試みによって、母が詩作に制限をかけるという事実は変化せず、母に支配されることの恐怖もまた解決されることはない。父と母とを詩作に対して関係づけることは、彼らに対する恐怖と愛着の両価性をさらに強化し、更新するだけに終わる。しかしながら、自らの精神を追い詰めながらも、このジレンマの中にとどまりつづけることこそが、逆に言えば、ヘルダリンにとっての、詩作そのものであったと言えるのではないだろうか。

そして、詩作と心理の「同一性という謎」を見出そうとする者もまた、解くことの可能性と不可能性とのジレンマに陥らざるをえない。作品内で名指される父と母、現実の父と母、そこから導かれる精神分析的な意味での父と母、それぞれのイメージは、やはり互いに断絶し、決して一致することはない。しかし、「同一性という謎」がそれらの間に見出され、ジレンマが継続する限り、問いもまた新たに発せられていく。それによって、謎は、神秘へと変質することなく、謎のままにとどまりつづけるのである。

---

[42]『あたかも祝いの日に…』によれば、ディオニュソスを胎内に宿したセメレーは、ゼウスの姿を見ようと欲したがゆえに身を焼かれた。にもかかわらず、酒神は無事誕生し、彼のおかげで、人々は身を焼かれることなく、天の火を（葡萄酒として）危険なく飲むことができるようになった。それと同様に、詩人も天の火を歌に包んで（危険のないものとして）人々に手渡す役割を担っている。詩人もまた、自らの手にけがれがなければ、天の火に焼かれることはない（Vgl. StA II/1, 119f.）。しかしながら、言語が持つ媒介性ゆえに、神的なものを無媒介的に言葉の中に定着させること、すなわち天の火を歌に包むことは不可能である。それゆえに、この詩のつづきにおいて、詩人は、暗黒の中に突き落とされる「偽りの司祭」（StA II/1, 120）と呼ばれるのではないだろうか。それでもまだ、詩人にはけがれがなく、天の火によって焼かれずにすむというのだろうか。

Vater- und Mutterbild bei Hölderlin

— „das Rätsel der Identität“ zwischen Poetik und Psychologie —

HAYASHI Hideya

Kunstwerke werden oft erörtert in enger Verbindung mit den Künstlern, die sie geschaffen haben. Mit dieser Methode aber werden Künstler leicht mystifiziert, weil die künstlerorientierte Erörterung der Kunstwerke sowohl die Besonderheit des Kunstwerks voraussetzen muss als auch die des Künstlers. Friedrich Hölderlin (1770-1843) kann dabei als Modellfall für einen Dichter gelten, der seit langem unter Mystifizierung gelitten hat. Zweifellos war Hölderlins Wahnsinn und dessen Bedeutung für Hölderlins Werk immer eines der zentralen Probleme in der Hölderlin-Forschung. Norbert von Hellingrath, der großen Anteil an der frühesten Hölderlin-Rezeption im 20. Jahrhundert hat, ging davon aus, dass Hölderlins Dichtungen durch das Verstehen seines Wahnsinns zu begreifen sind. Hellingrath aber gehörte zum George-Kreis, einem Zirkel, der ein heroisches Dichterbild propagierte. Hellingraths Hölderlinbild ist daher ebenfalls mystifizierend.

In der späteren Hölderlin-Rezeption ist dieses Hölderlinbild kritisiert worden, insbesondere durch Jean Laplanche, einem französischen Theoretiker der Psychoanalyse. Laplanche erkennt in der Tiefe der Dichtung und des Geistes Hölderlins eine „question du père“: Hölderlin verlor mit zwei Jahren den leiblichen Vater durch einen Gehirnschlag, mit acht Jahren den Stiefvater durch eine Naturkatastrophe. In Hölderlins Geist und Dichtung hatte daher die Abwesenheit des Vaters, in den Worten Lacans, der ‚Name-des-Vaters (le Nom-du-Père)‘, eine zentrale Funktion. ‚Der Name des Vaters‘ trennt als Gesetz das Kind von der Mutter. Dieser Vorgang ist als ambivalenter zu verstehen. Zum einen erweckt der Vater, indem er die Bindung zur Mutter unterbricht, beim Kind zwar große Furcht und Unwillen (eine sogenannte ‚Kastrationsangst‘), aber zum anderen stellt er denjenigen dar, der das Kind vor der Bedrohung der Mutter bewahrt. Diese Bedrohung zeigt sich biographisch bei Hölderlin darin, dass er hinter der Zuneigung für seine Mutter (und analog dazu auch hinter der Zuneigung für Schiller) eine starke Furcht vor ihrer intellektuellen Bevormundung empfunden hat. Weil die Mutter die Dichtung ihres Sohns nicht für annehmbar hielt und sie

unterdrückte, musste er die Mutter ablehnen. Daher begann Hölderlin ab der ‚Homburg-Zeit' seine Dichtung in Anwendung des heiteren Hymnenstils am Väterlichen zu orientieren. Da das Bild des heiteren Vaters aber retrospektiv, vermittelt durch Aussagen der Mutter, geschaffen wurde, ist die Sehnsucht nach dem Vater bei Hölderlin tatsächlich immer mütterlich bedingt. Hölderlin kann also keineswegs auf die Zuneigung für sie verzichten. Er geht davon aus, dass auch die Mutter einen positiven Einfluss auf seine Dichtung ausübt. Die Trauer, die von der um ihren Mann trauernden Mutter ausgeht, wird zur notwendigen Bedingung für Hölderlins Dichtung. Die bisherige Sekundärforschung hat den Einfluss des Mütterlichen bei Hölderlin weitestgehend marginalisiert und in dessen späteren Gedichten eine einseitige Orientierung am Väterlichen gesehen. Aber wichtig für Hölderlin ist nicht eines von ihnen, sondern der Bezug auf beide Pole.

Dazu ist zu beachten, dass die beiden Strömungen gegensätzlich auf seine Dichtung wirken. Der Vater, d.h. der „Vatergott", gibt dem Dichter einerseits „himmlisches Feuer", das als Inspiration für die Dichtung dient, und stellt gleichzeitig aber auch die Gefahr dar, ihn zu verzehren. Andererseits besteht bei Hölderlin das Bestreben, die Mutter, die die Dichtung beschränkt, positiv zur Quelle und Triebkraft der Dichtung zu machen. Dabei handelt es sich um den widersprüchlichen Versuch, in der Identifikation mit ihr ihre Bevormundung zu fliehen. Sich in diesem Dilemma zu verorten, das bestimmt Hölderlins Dichtungen.

Die Studie, die Poetik und Psychologie in Verbindung bringt, bezieht sich auf die Annahme, dass beide Felder in einer Identität vermittelt werden können, gleichzeitig ihr heterogenes Verhältnis aber das Hervorbringen einer stabilen Identität verhindert. Diese Identität ist daher zu verstehen als ein unlösbares Rätsel, das eine absolute Dechiffrierung verweigert, und den Versuch anregt, es weiter zu dechiffrieren. Diese Unabgeschlossenheit auszuhalten und das Rätsel nicht als Mysterium zu lesen, darin besteht das produktive Potential dieser Konstellation.